流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和六年十二月句会（第一五一回）

兼題　［年忘れ］

催日　令和六年十二月二十八日

開催場所　生涯学習センター

出席者　五名

投句者・選句者　七名

（六点句）

●薪棚のひとつをとれば冬の蝶　玄鳥

選評…この句は読んで韻がスムーズに流れる。中句の「ひとつをとれば」で、ひっそりと寒さに凍ってしまったようにじっと耐えている冬の蝶と出会う。その瞬間に作者はきっと何か「はっと」させる感じさせてくれる何かを受けたのでしょう。読者にも語順から同じ感覚を与えてくれています。寒さできっと動かない蝶と薪の燃え上がる暖かさとの対比が強く感じ秀句である。（互酬記）

（三点句）

●寒空に防犯の旗力あり　小牧

選評…近頃犯罪が多様化し、エスカレートしているので防犯の大切さが一層言われている。防犯を呼びかける旗を、防犯パトロール隊が持ち街を巡っているのか、街の随所に立っているのだろうか。いずれも寒空に風を受け、力強くはためく様が目に浮かぶ。（徹心記）

●一隅を照らし咲き出ず石蕗の花　夢心

選評…我が家の石蕗も片隅に植えてあり、葉の緑の濃さも相まって普段は地味な存在ですが、花が咲くと冬には珍しい黄色が辺りを明るく照らし、見ているこちらの心も温まります。また、出づ”は長い真っすぐな茎に咲く様子にぴったりです。描写力が素晴らしいと思いました。（寿歩記）

●終電の流山行き冬連れて　互酬

選評…象と抽象のコントラストが面白い。はて、この句の冬とは一体何であろうか?季節そのものではなく、幸谷駅あたりで長時間待たされて冷え切った体や、マフラー、手袋、コートで着膨れた人々のことであると解釈した。（玄鳥記）

（二点句）

忘れえぬ人を偲びつ年忘れ　夢心

友二人五十回目の忘年会　徹心

冬漆黒マンハッタンは清治の切り絵　小牧

風吹けど景色動かぬ冬田かな　寿歩

きらめきて降り来る落葉絶え間なし　夢心

悴む（かじかむ）手友の背中は温かや　艸寛

忘年の集いの日時忘却し　徹心

（一点句）

年忘れアンテナショップに顔揃う　小牧

息災に家族友人年忘れ　互酬

年忘れ銀座のロシア料理店　玄鳥

同級会米寿の元気集う秋　夢心

お開きの見えぬラインの年忘れ　寿歩

寒鴉まとまりさふでまとまらず　玄鳥

（投句）

後期高齢者良しも悪しきも年忘れ　艸寛

合奏と笑いの二時間年忘れ　寿歩

忘るべき覚え置くべき悩ましい　徹心

折鶴に吾が名を刻む開戦日　玄鳥

冬明り感謝しか無しこの宇宙　互酬

この星（地球）の憂き様忘れ年迎ふ　徹心

遅紅葉水飲んでみせ通り抜け　小牧

近道や凍れる田圃渡り行く　艸寛

寒暖差耐えて忍ぶ冬からだ　互酬

楚々と立つ一重の白き山茶花かな　寿歩

吹雪なり指をこすりて首丸め　艸寛

『句会後記』

今年最後の句会は兼題にそれぞれの一年を振り返る思いが伝わってきて感慨深いものとなりました。菅原さんの手になる句集十二号も完成しました。枕元に置き就寝前に鑑賞します。ありがとうございました。青木さんをはじめ皆さん来年もよろしくお願いします。どうぞ良いお年をお迎えください。

（小牧記）